東京外国語大学　ＩＣＳ　１１—　総合文化研究所

2007 年度所員活動報

機関誌『総合文化研究』11 号付録

阿保雅行

【論文・研究資料】

1）阿保雅行（2007）本学におけるスポーツ･身体運動基礎科目の満足度と改善度について：2006 年度 1 学期のアンケート調査を中心に、東京外国語大学論集第 73 号、pp.185-195.

2）阿保雅行･長野史尚･神尾正俊･関岡康雄（2007）学生審判員養成講習会に関する満足度･改善度について、陸上競技研究第 69 号、（社）日本学生陸上競技連合、pp.38-41.

3）阿保雅行・伊藤宏・岡野進（2007）全国小学生陸上競技交流大会の競技運営に関する満足度・改善度について、陸上競技研究紀要第 3 巻、（財）日本陸上競技連盟、pp.32-38.

4）阿保雅行（2007）本学におけるスポーツ･身体運動基礎科目の満足度と改善度について：2007 年度 1 学期のアンケート調査を中心に、東京外国語大学論集第 75 号、pp.293-303.

【テキスト（校閲・指導）】

1）阿保雅行（2007）陸上競技、スポーツルール 2007、（株）学習研究社、pp.1-22.

【その他（とりわけ国際的活動）】

①第 17 回アジア陸上競技選手権大会（アンマン、ヨルダン、2007 年 7 月）に ATO（Area Technical Official、地域競技役員）として参加した。

②第 11 回世界陸上競技選手権大会・大阪 2007 に TIC（Technical Information Centre）の責任者（TIC 部長）として競技運営に半年間（2007 年 1 月～ 9 月）携わった。

青山亨

【論文】

・“A New Interpretation of the ‘East-West Division of Java’ in the Late Fourteenth Century.” *Acta Asiatica (The Toho Gakkai)*, No. 92, pp. 31-52. 2007 年 1 月 .

・「インド化再考――東南アジアとインド文明との対話――」『総合文化研究』Vol. 10, pp. 122-143. 2007 年 3 月 .

【報告・その他】

・「アチェ文化財復興支援室の活動について」『史資料ハブ 地域文化研究』（21 世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」総括班）No. 9, pp. 23-32. 2007 年 3 月.

・「私のジョグジャカルタ・クンバリ」『インドネシアニュースレター』（日本インドネシア NGO ネットワーク）No. 61, pp. 22-26. 2007 年 10 月.

【研究発表】

・“Indianization Revisited: A Comparative Review and Its Contemporary Significance.” Paper presented at a seminar held at the Center for Religious and Cross-Cultural Studies (CRCS), Graduate School, Gadjah Mada University, Yogyakarta. 2007 年 9 月 4 日 .

荒このみ

【著書】

・『歌姫あるいは闘士　ジョセフィン・ベイカー』講談社、2007 年 6 月 1 日。総頁 301。

【論文】

・「ニュー・プリマーとしての「ピコーラ」――トニ・モリスンの『青い目がほしい』」、『総合文化研究』第 10 号、東京外国語大学総合文化研究所、2007 年 3 月 15 日、pp.37-65。総頁 190。

・「ビラヴィドはなぜ黒いドレスで現れたか」、吉田廸子編著『もっと知りたい名作の世界⑧ビラヴィド』ミネルヴァ書房、2007 年 7 月 30 日、pp.133-146。総頁 164。

【共編著】

・「序章　日本のプリズムを通した〈アメリカ〉」pp.1–13、「座談会「アメリカ研究の越境」とは何か」pp.309 - 399、『文化の受容と変貌』（共編著生井英考）シリーズ・アメリカ研究の越境第 6 巻、ミネルヴァ書房、2007 年 11 月 10 日。総頁 399。

【エッセイ】

・「アメリカ現代作家と新しい解釈の古典」、『古典新訳の発見――“新大陸”はここにあった！』光文社翻訳出版部編、2007 年 2 月 20 日、pp.87 - 91。総頁 149。

・「『アウト・オブ・プレイス』の強さ――あとがきにかえて」、小林憲二編著『変容するアメリカ研究のいま――文学・表象・文化をめぐって』彩流社、2007 年 3 月 15 日、pp.345-353。総頁 353。

・「ジョセフィン・ベイカーの見た夢」、講談社「本」8 月号、2007 年 8 月 1 日、pp.31-33。

【書評】

・ アーザル・ナフィーシー著、市川恵里訳『テヘランでロリータを読む』、「イスラム世界」日本イスラム協会、2007 年 3 月 20 日、pp.83-88。総頁 141。

・Susan Courtney. *Hollywood and Fantasies of Miscegenation: Spectacular Narratives of Gender and Race, 1903-1967*. (Princeton: Princeton UP, 2005. 404pp.) *African American Review*, Saint Louis University, Vol.41, No.1, Spring, 2007 (192pp.), pp.188-190.

・カレン・テイ・ヤマシタ著『熱帯雨林の彼方へ』世界の文学、東京新聞、2007 年 8 月 23 日。

藤井守男

・「ペルシア語タフスィール『神秘の開示』に見る神秘主義的表象世界」、『東洋文化』87（東京大学 東洋文化研究所）、2007 年 3 月、117-137 頁 .
・「ペルシア語説教テクストと神秘主義 Taṣawwuf との係わりをめぐる考察」、『古典期ペルシア語神秘主義テクストのデータベース化による文体論的研究』（平成 16 年度～ 18 年度科学研究費補助金：基盤研究 (B)：研究代表者・藤井守男）研究報告書所収、平成 19 年 3 月、3-41 頁。

博多かおる

次の二つのテーマに沿って研究を行った。
Ⅰ．19 世紀フランス音楽・文学における「分身」のテーマ、および民謡とロマンスの役割について。
Ⅱ．平成 19 ～ 21 年度科学研究費補助金（萌芽研究）による「フランス近代文学における大衆の登場と感覚風景の変化についての研究」。

【著書】
・「『オノリーヌ』における謎の読解と共有の幻想」、『テクストの生理学（柏木隆雄教授記念論文集）』（朝日出版社）所収、2008 年 3 月刊行予定

【紀要論文】
・「バルザックにおける歌」、『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）田村毅先生退職記念号、2008 年 3 月刊行予定

【論文（書評）】
・『レストハウス、あるいは女はみなこうしたもの』『汝、気にすることなかれ――シューベルトの歌曲にちなむ死の小三部作』エルフリーデ・イェリネク著 / 谷川道子訳、『総合文化研究 Trans-cultural Studies』vol.10、2007 年 3 月 15 日、p.170-176.

【講演録】
・「音に出会う、人に出会う――音楽と文学を通して見たフランス」、『大阪日仏協会会報』第 25 号、2007 年 6 月、p.12-18.

【口頭発表等】

・19 世紀ロマン派文学･音楽における自己分裂のテーマ「Double/ 分身」､ピアノ演奏･解説：博多かおる、司会・解説：恒川純子・野田茂恵、2007 年 7 月 30 日、東京外国語大学研究講義棟 422（総合文化研究所）

【研究会発表】

・「バルザックにおける歌についての一考察」東京バルザック研究会、2007 年 12 月 1 日、早稲田大学文学部 39 号館第 6 会議室

岩崎務

【論文】

・「ボエティウス『哲学の慰め』におけるオルペウス神話」､『中世西欧文学の「間テクスト性」に関する文献学的･言語学的研究』（平成 15 ～ 18 年度科学研究費補助金研究成果報告書）、2007 年 3 月、1-20 頁。

【書評】

・村尾誠一著『残照の中の巨樹――正徹』､新典社､2006 年 6 月（『総合文化研究』第 10 号、東京外国語大学総合文化研究所、2007 年 3 月、153-155 頁）。

加藤雄二

【5月】

・『東京外国語大学論集』に、他に発表されたメルヴィル批評史のオリジナル・ヴァージョンを寄稿する。

【8月】

・ポーランド・スチェチーンで開催された、“Hearts of Darkness: Melville and Conrad in the Space of World Culture” という学会で、“In the Dark Narcissism of Se(a)cret Sh(e)aring/ Sh(e)aring Se(a)cret: Joseph Conrad and Herman Melville in the Global Postcolonial Contexts” というタイトルで研究発表を行った。「他者」がテクストの形式を取って現れてくる作品として、メルヴィルとコンラッドの一部の作品を論じたもの。とくに英米の研究者と意見交換ができ、有益だった。

【9月から10月】

・エドガー・A・ポーについての論考を完成しようとするが、未完成に終わる。来年以降に発表することになるのか？　ポーについては、英文の論考も未完成になっているので、できれば来年度の授業が始まる4月以前に完成したい。

【12月】

・『総合文化研究』の原稿募集にかこつけて勉強するべく、「白い想像力と精神分析のダイアレクティックス」という原稿を書く。

【1月】

・８月のメルヴィル・コンラッドについての原稿を一応完成し、メルヴィル協会・コンラッド協会による出版のためのセレクション・コミッティーに提出する。
・来年度6月にメイン州で行われる、“Starting Over” と題されたナサニエル・ホーソーンに関するコンファレンスの案内が来たので、発表概要を作成する。

川口健一

【事典項目】

・「ベトナム語」『日本語学研究事典』明治書院、74頁、2007年1月18日刊行。

【書評】

・『マフフーズ・文学・イスラム――エジプト知性の閃き』（八木久美子著、第三書館、2006年9月20日刊行）、『総合文化研究』（第10号）東京外国語大学総合文化研究所、pp.156-157、2007年3月15日発行。

【研究調査】

・科学研究費補助金基盤研究 (C)「1940年代前半ハノイにおけるベトナム文学者・知識人の文化活動の考察と再評価」（研究代表者、平成17～18年度）のための調査、資料収集を昨年夏に続き、2007年3月にハノイにおいて実施した。

菊池陽子

【報告書】

・「ラオスでの調査報告」平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（研究代表者 村嶋英治「東南アジア大陸部現代史に於ける共産主義運動の多面的根本的解明――タイを中

心として」）研究成果報告、2007 年 3 月、pp.1-15.

栗田博之

・論文：なし
・翻訳：なし

共同研究、学会等の研究会に出席したが、それ以外はいつもの如く、年度評価、認証評価等の点検・評価活動に忙殺される毎日であった。点検・評価活動の合間に時たま息抜きとして研究活動を行うという状況がずっと続いており、それが普通の状態なのだと思うようになってしまった。

李孝徳

・文部科学省「海外先進研究プログラム」で米国に滞在。

【論文】
・“Inscriptions from Those without a ‘Place’: World Literature as Read from the Diaspora in John Okada’s No-No Boy”, *Quadrante*, No.9, pp.411-20，東京外国語大学海外事情研究所，2007 年.

松浦寿夫

【文章】
・「弱さの英雄主義について」、『水声通信　特集：阿部良雄の仕事』第 18 号（2007 年 6 月）、66-69 頁。
・「a-chroniques」15・16、『水声通信』第 15 号（2007 年 1・2 月）、10-12 頁；第 19 号（2007 年 7・8 月）、2-7 頁。
・「ふたつの鏡」1 ～ 3、『水声通信』第 19 号（2007 年 7・8 月）、41-46 頁；第 20 号（2007 年 9・10 月）、42-48 頁；第 21 号（2007 年 11・12 月）、24-28 頁。
・「雲の教え」、美術館たより『たいせつな風景』第 8 号、神奈川県立近代美術館、2007 年 9 月、7-9 頁。

【制作】
・「岡崎乾二郎・松浦寿夫展」、ガレリア・フィナルテ、名古屋、4 月 16 ～ 28 日。

【シンポジウム】

・「ルネ・シャール――詩と絵画」、主催：総合文化研究所、協力：フランス語研究室、2007 年 6 月 21 日。

・「ルネ・シャール生誕 100 年記念特別シンポジウム」、共催：総合文化研究所・日仏会館、後援：フランス大使館・日本フランス語フランス文学会、2007 年 6 月 23 日。

水野善文

2007 年一年間における活動をご報告します。

【論文】

・ 2007 年 3 月 15 日 「死の手紙、東へ？西へ？ ――説話伝承研究の試み――」『総合文化研究』第 10 号、pp.78-102.

〈概要〉「死の手紙」のモチーフを包含する説話、民話をインドからヨーロッパまで広くユーラシア世界の古代から近代を視野にいれ渉猟し、その伝承の様を追ってみた。同じモチーフをもつ諸々の説話も、更に小単位を構成するプロット毎に分析すると、インド古代からヨーロッパ中世へ伝承の痕跡をたどれる場合と、逆にヨーロッパに発してインドに至ったと思われるものもあることがわかった。

【概説書・記事】

・ 2007 年 8 月 31 日 （補説）「バクティ信仰の潮流」小谷汪之編『世界歴史大系・南アジア史 2 ――中世・近世――』（山川出版社）pp.139-143.

【学会レポート】

・ 2007 年 3 月 15 日 Session Report 4: How does the study of literature contribute to South Asian studies ?（『南アジア研究』第 18 号、pp.249-250.）

【研究発表等】

・ 2007 年 7 月 21 日 ‘バクティ研究会’（拓殖大学）における研究報告「文学作品にみるバクティの風潮」

【研究会の運営等】

・ 2007 年 3 月 9–11 日 科研「多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として」（研究代表者：水野善文）第 5 回研究会（at 神戸）コーディネート。

・ 2007 年 5 月 26 日 科研「多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として」（研究代表者：水野善文）国際シンポジウム「現代インド文学――潮流と課

題――」（at 東京外国語大学）司会。

・2007 年 6 月 30 日　科研「多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として」（研究代表者：水野善文）第 6 回研究会（at 拓殖大学）コーディネート。

・2007 年 10 月 6 日　日本南アジア学会・第 20 回全国大会における小パネル②「19 世紀の南アジア文学にみる作者の内面の揺れ：変革期の多様性」（科研「多言語社会における文学の歴史的展開と現在:インド文学を事例として」主催）のコーディネートならびに司会。

村尾誠一

2007 年中に活字になったのは以下のものです。

・「正徹和歌の特質――『前摂政家歌合』を視座に――」（『東京外国語大学論集』73 号・2007 年 3 月）

・「会津八一ノート――近代古寺巡礼の東と西――」（『総合文化研究』10 号・2007 年 3 月）

・「『新続古今和歌集』勅撰和歌集の終焉」（『国文学解釈と鑑賞』72 巻 5 号・2007 年 5 月）

・「中世和歌における京極派的なるもの――二条派和歌との接点からの試論――」（『東京外国語大学論集』75 号・2007 年 12 月）

その他次のような報告も行いました。

・「日本文学の自然――日本の古典和歌におけるインドからの影響を視座に――（Nature of Japanese Literature : A perspective on the influence of India on Japanese classic *Waka* Poem）」（Transcending Cultural Aestheticism : Exploring Literature Exchange between India & Japan in Poetic Forms & Content　2007 年 10 月）

・「新勅撰和歌集論のために――花実論とその周辺――」（東京大学中世文学研究会例会・2007 年 11 月）

前者は日印文化交流 50 周年記念行事の中でのものです。英文と（おそらく）日本文で報告書となる予定です。後者は論文にまとめるべく鋭意努力中です。

また、監修者の一人として関わっていた高等学校国語教科書『国語総合』（数研出版・2007 年 4 月）がいよいよ使用年度を迎えました。同時に指導書『国語総合教授資料』（数研出版・2007 年 4 月）も刊行されました。

中山和芳

【著書】

・『ミカドの外交儀礼　明治天皇の時代』（朝日新聞社、2007 年 1 月）。

西永良成

【訳書】

・ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』（河出書房新社、2008 年 2 月）

【編訳書】

・『ルネ・シャールの〈言葉〉』（平凡社、2007 年 6 月）

【論文】

・« Roman, essai : affinités électives, un exemple (Kenzaburô Oé) », *L'Atelier du roman*, juin 2007.

【翻訳】

・Kenzaburô Oé, « Je ne peux pas revivre, et pourtant nous pourrons revivre », *L'Atelier du roman*, septembre 2007.（フランソワ・ルーセルとの共訳）

【雑誌記事】

・「ルネ・シャールの今日性」（白水社、《ふらんす》8 月号）

【国際シンポジウム報告】

・« Francophonie littéraire au Japon »（ギリシャ・ナフプリオ、2007 年 9 月 29 日）

【講演】

・シリーズ『古典の知恵、古典の愉しみ』「ラ・ロシュフコーと私たち」（日仏会館、2007 年 10 月 26 日）

岡田和行

【論文】

・「D. ナツァグドルジと詩『わが故郷』（モンゴル語）」『内蒙古大学学報（哲学社会科学蒙文版）』、呼和浩特市、第 36 巻第 3 期（総第 131 号）、2007 年 5 月 15 日、85-89 頁。

【書評】

・「ドジョーギーン・ツェデブ / 池田大作『友情の大草原――モンゴルと日本の語らい』を読む」『週刊読書人』、第 2715 号、2007 年 11 月 30 日、3 頁。

【研究発表】

・「日本におけるモンゴル文学研究」、第 22 回韓国モンゴル学会国際学術会議、於檀国大学（ソウル）、2007 年 2 月 2 日。

・「井上靖の歴史小説『蒼き狼』をめぐる論争について」、日本モンゴル国交樹立 35 周年「モンゴルにおける日本年」記念第 2 回国際学術会議「モンゴル系民族の過去と現在」、於モンゴル国立大学 5 号館（ウランバートル）、2007 年 8 月 28 日。

・「第 2 回国際学術会議『モンゴル系民族の過去と現在』参加報告――文学芸術部会を中心に」、日本モンゴル文学会秋期研究発表会、於大阪外国語大学記念会館（大阪大学箕面キャンパス内）、2007 年 11 月 24 日。

【市民講座】

・「モンゴルの伝統文学の系譜――声の文学と文字の文学――」、平成 19 年度後期調布市民カレッジ「悠久のモンゴル 草原の民の歴史と文化」、第 5 回、2007 年 12 月 4 日。

・「モンゴルの近代文学の曙光――ナツァグドルジの生涯と作品――」、平成 19 年度後期調布市民カレッジ「悠久のモンゴル 草原の民の歴史と文化」、第 6 回、2007 年 12 月 18 日。

岡田知子

【翻訳】

・オム・ソンバット『地獄の 1366 日――ポル・ポト政権下での真実』財団法人大同生命国際文化基金

【その他】

・「カンボジアの現代文学をめぐる最近の活動」『東京外大東南アジア学』第 12 巻、2007 年、pp.105–106。

・「カンボジアのカレー」『アジア・カレー大全』旅行人、2007 年、pp.92-97。

・「世界の文学 カンボジア『平和願う家族の苦難の記録』」東京新聞（夕刊）、2007 年 5 月 17 日掲載

【研究】

・科学研究費補助金基盤研究 (C)「現代カンボジア文学の翻訳と研究」、研究代表者、2007 年～ 2009 年。

・東南アジア諸言語研究会（慶應義塾大学言語文化研究所）クメール語担当

【社会貢献】

・特定非営利活動法人「幼い難民を考える会」第 4 回チャリティ・カンボジア語講座（2007

年５～７月，全８回）

佐々木あや乃

【論文】

・「ハハーフェズ詩注解 (4)」『東京外国語大学論集』第 75 号、pp.137-151．2007 年 12 月 21 日

・「ペルシア語散文テクスト間における神秘主義用語の対比的考察――『神秘の開示（*Kashf al-Asrar wa ‘Uddat al-Abrar* (al-Nawbat al-Thalithah)）』データベースと『神秘主義入門解説（*Sharh-i ta‘arruf*）』に基づいたペルシア語神秘主義用語集作成への試み――」、『古典期ペルシア語神秘主義テクストのデータベース化による文体論的研究』（平成 16 年度～18 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究報告書、研究代表者：藤井守男）pp.115-158. 平成 19（2007）年 3 月

【学会発表】

・「神秘主義用語の変遷――『神秘主義入門解説』と『神秘の開示』との比較（『神秘の開示』第三階梯のデータベースを用いて）」（ペルシア語）、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業国際セミナー「イランとイスラーム――思想と信仰――」2007 年 9 月 7 日、イスラーム大百科事典センター（在テヘラン）

・「ハーフェズの詩的世界にみられる「人間関係」をめぐる一考察」（ペルシア語）、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業国際セミナー「イランとイスラーム――イラン文化とペルシア文学――」2007 年 1 月 7 日、千里ライフサイエンスセンター

【教材（専攻語内資料）】

・『はじめて読むペルシアの物語 1 』p.ii ＋ 44．付属 CD2 枚組　2007 年 5 月 14 日（学部競争的経費）

【研究調査】

・ 文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 (B)）「語り手と女：ジェンダーを巡るイランの文学的言説の研究」（研究代表者：藤元優子（大阪大学））により、8 月から 9 月にかけて、資料収集及び調査のためイラン（テヘランとシーラーズ）へ出張した。

・2007 年 9 月下旬、オマル・ハイヤーム作『ルバイヤート』（ホセイン・サーデギー博士編）の翻訳を進めるため、スイスのモントルーで海外研修をおこなった。

【その他】

・映画「ハーフェズ――ペルシャの詩（うた）――」解説監修 p.7, pp.10-11.

・映画「ネイビーファイル」ペルシア語監修　2007 年 5 月以降随時

柴田勝二

二〇〇七年中に発表した論文等は以下の通りです。一昨年末に夏目漱石に関する論考をまとめましたが、その後は村上春樹と中上健次を中心とした現代文学を対象としています。この二人はやはり七〇年代後半以降の日本のポストモダン文学の中心的な担い手ですが、その位置づけは充分になされていないようです。資本・暴力・アジアといった主題性を二人は共有しており、そこに開示されているポストモダン性をあらためて追求していこうと考えています。

【論文】

・「転移する暴力――『岬』への道程」(『敍説』Ⅲ－１、二〇〇七・八、二四〇～二五六頁)
・「受動的な冒険――『羊をめぐる冒険』と〈漱石〉の影」(『東京外国語大学論集』第七四集、二〇〇七・七、一四二～一六一頁)
・「重層する現代と古代――『枯木灘』の時空」(『東京外国語大学論集』第七五集、二〇〇七・一二、三二八～三四三頁)

【書評】

・西永良成『激情と神秘――ルネ・シャールの詩と思想』(『総合文化研究』10 号、二〇〇七・三、一四七～一四九頁)
・田中美代子『三島由紀夫　神の影法師』(『三島由紀夫研究』４号、二〇〇七・七、一六八～一六九頁)

【学会発表】

・「反転する過剰と欠如――『鼻』から『歯車』へ」(国際芥川龍之介学会、於・寧波大学、二〇〇七・九・一五)

【講演】

・「夏目漱石と村上春樹」(於・寧波大学、二〇〇七・九・一七)
・「夏目漱石の文学」(「漱石クイズ」解説講演、於・新宿区立図書館、二〇〇七・一一・四)

鈴木聡

【論文】

・「夢と記憶――ヴラジーミル・ナボコフの『マーシェンカ』」(『東京外国語大学論集』第七四号、五九～七九ページ)。

・「他者と異界――ヴラジーミル・ナボコフの『透明な対象』」(『東京外国語大学論集』第七五号、一一三～三六ページ)。

【研究発表】

・「Vladimir Nabokov, *Notes on Prosody and Abram Gannibal: From the Commentary to the Author's Translation of Pushkin's* Eugene Onegin (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1964) をめぐって」(二〇〇七年度日本ナボコフ協会秋季研究会、十月二十八日、京都大学)

武田千香

【科学研究費補助金による研究報告書および論文】

・(研究代表者) 平成 15 (2003) 年度～平成 18 (2006) 年度　科学研究費補助金　基盤研究 (C) (2) (課題番号 15520158)「マシャード・デ・アシスと夏目漱石――対蹠地の同時代作家の近代化に対する共通意識――」、報告書 (共著)、230 頁、2007 年 6 月。(今年発表文の収録論部は次のとおり)

＊ “Machado e Sôseki — Afinidades entre dois contemporêneos antípodas — ”、平成 15 (2003) 年度～平成 18 (2006) 年度　科学研究費補助金　基盤研究 (C) (2) (課題番号 15520158)『マシャード・デ・アシスと夏目漱石――対蹠地の同時代作家の近代化に対する共通意識――研究成果報告書』、pp. 104-151、2007 年 6 月。

＊「対蹠地の同時代作家の親和性――比較文学の新たな視座をさぐる――」、単著、東京外国語大学論集第 74 号、p. 37-59、2007 年 7 月。

【著著 (教科書)】

・『ＮＨＫラジオ　短期集中講座 2007　くらしで使えるポルトガル語――ブラジル人と話そう！』、単著、日本放送出版協会、111 頁、2007 年 8 月。

＊別売ＣＤ (ＮＨＫサービスセンター発行、2007 年 8 月)

【講演・報告・発表等】

《専攻分野》

・国際交流基金主催　中南米理解講座 2006 年度第Ⅲ期「ラテンアメリカ文学は何を語って

きたか」第７回「マシャード・デ・アシスは近代化の何に危機感を抱いたか？」、2007年３月５日。

・「ＮＨＫラジオ講座　短期集中講座2007　くらしで使えるポルトガル語――ブラジル人と話そう！』(20課＋総集編)、ＮＨＫラジオ第２放送、2007年８月21日（火）～８月25日（土)、８月27日（月)、９月１日（土)、午後２時30分～２時45分、２時45分～３時。

・東京外国語大学・読売新聞立川支局共催　連続市民講座「世界の〈生〉きるかたち」第８回「ブラジルの歓び――カーニバルのいま・むかし」、2007年12月８日。

《社会連携分野》

・天理大学アメリカス学会・同大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ブラジル・ポルトガル語コース共催　国際シンポジウム「アメリカス世界と外国人問題」、シンポジウム「日本における公教育とブラジル人学校」、「多言語・多文化社会の求める人材育成を目指して」、パネリストとして報告、2007年11月18日。

【その他】

・NHKラジオ第１放送「ラジオほっとタイム　いきいきホットライン」『出来ますか？外国人との共生社会：調和ある共生社会とは？』、2007年12月７日午後５時05分～５時55分（ナマ放送)。

谷川道子

今年も慌ただしい一年でしたが、日本独文学会常任理事が2007年６月で足掛け10年の４期目を務め上げ、５選目からは拒否権ありなので少しホッとしています！　語劇GPが最終年度で、さて、３月までにどう着地できるでしょうか。９月から亀山学長体制がスタートで、図書館長兼学長特別補佐として定年前の最後のご奉公、非力ながら力を尽くしたいと思っていますので、よろしくサポートお願いします。

研究活動としては進行中の仕事は多少ありますが、今年はここに書けるものはあまりありません……。

【翻訳単行本】

・「日本におけるドイツ年2005／2006」企画のひとつ『ドイツ現代戯曲選30』シリーズ、論創社から全30巻のシリーズで刊行されるはずが、実はいまだ最後まで完結していないのですが……。私が翻訳を担当した３冊のうち、博多かおるさんに昨年の本誌で書評を書いていただいたのに、第28巻としてのイェリネクの二冊目『レストハウス――女はみんなそうしたもの』の刊行は、事情あって2007年６月にずれこみました。訳者解題（134～156頁）を入れて全160頁。

・ブレヒト『作業日誌』全２巻――これも一昨年からの仕事で、1976 ～ 77 年にかけて河出書房新社から全４巻で刊行されたブレヒトの『作業日誌』の再刊、創業 120 周年記念企画として 2007 年 9 月と 11 月にやっと出ました。全２巻あわせて 1300 頁、改訳というより、訳注も含めてほぼ訳し直しに近く、今回も五人の共訳者で同窓会のような二年がかりの共同作業。ブレヒトを若い世代に手渡したいという思いでカラフルな装丁に模様替えし、それにふさわしく読みやすい訳文になっていると信じ／念じつつ……。

【論文】

・「トランジット・ベルリン――あるいは〈東〉と〈西〉のトポロジー」、『総合文化研究』第 10 号　特集：〈東〉と〈西〉のディアレクティク所収、2007 年 3 月、66-77 頁。

【書評】

・『パロデイ・オペラの歴史』（図書新聞 6 月）

【シンポジウムや対談、寄稿としては】

演劇実践の現場にもいろいろ協力はしています。

・イェリネク『雲。家。』の PortB 公演のポストトークに参加して、劇団 web サイトにそのトークの再録とともに劇評も掲載（3 月）
・彩の国劇場でのベルギーのヤン・ロワース公演『イザベラの部屋』にパンフレット原稿を寄稿（4 月）
・日仏演劇学会シンポ「フランス演劇とドイツ演劇の現在」にパネリストとして参加（6 月）
・太田省吾追悼文集（五柳書院刊）に寄稿「沈黙が語る人　太田さん」（9 月）
・世田谷パブリックシアター公開講座シリーズ「公共圏としての劇場」で講演：「演劇王国ドイツの公立劇場制度について」（11 月）

【研究プロジェクト等への参加】

・科研費：基盤研究 (C) の最終年度で、6 月に報告書を提出。
・早稲田大学演劇博物館 GCOE に特別研究員として参加協力。
・2008 年秋にドイツ（語）で刊行される日本演劇特集の単行本刊行への協力。
・同じくドイツ(語)で 2008 年中に刊行予定の多和田葉子特集の単行本刊行への寄稿と協力。
・早稲田大学演劇博物館 GCOE での「日本から見たドイツ演劇」プロジェクトも進行中。

土佐桂子

【報告書】

・「宗教用地における移住と居住民の世帯戦略：カリスマ僧没後の変化を中心に」文部省科

学研究費報告書『ミャンマー少数民族地域における生態資源と世帯戦略：広域比較に向けて』（代表者：速水洋子）2007 年 3 月、182-216 頁。

【その他】

・「ミャンマーのいま:ブログからみえること」『すばる 12 月号』2007 年 12 月、190–98 頁。

【発表】

・「ミャンマー社会における仏教と僧侶」（「20 年目の軍事政権：いまミャンマーで何が起きているか」日本財団開催セミナー、2007 年 11 月 7 日）

宇戸清治

【論文】

・「チュート・ソンスィー監督映画におけるナショナリズムについて」（『東京外大東南アジア学』第 12 巻、単著、pp.1-14、2007 年 3 月）。
・「1980 年代のタイ映画に表象された大衆文化の変容の研究」平成 16 年度～ 17 年度科学研究費補助金研究成果報告書、2007 年 3 月、120 頁。
・「タイの現代文学は何を描いているか」（『所報』2007 年 11 月号、バンコク日本人商工会議所、単著、pp.25-33、2007 年 11 月）。

【著書・翻訳】

・『初めての外国語（アジア編）タイのことば』（文研出版、監修、2007 年 1 月、40 頁）。
・『鏡の中を数える』（プラープダー・ユン著、翻訳、Typhoon Books Japan、2007 年 5 月、244 頁）。

【研究調査】

・ 科学研究費補助金基礎研究 (C)「タイ映画におけるナショナリズムの研究」（研究代表者）平成 18 ～ 19 年度。本年度はタイとラオスの映画を取り巻く状況について 8 月に現地での調査、資料収集、研究を実施した。

【その他】

・「世界の文学タイ：ラープチャルーンサップ短篇集『観光』：グローバリズムの壁を暗示」（東京新聞、2007 年 3 月 29 日夕刊）。
・ 独立行政法人 JICA 青年海外協力隊語学諮問委員としてタイ語教材・試験問題作成、プログラム評価に協力（2007 年 4 ～ 12 月）。
・ 東南アジア文学賞受賞作家プラープダー･ユン学内講演会「現代タイの文学と映画を語る」

（2007 年 7 月 6 日）をコーディネート。

上原泉

【論文】

・上原　泉（2007）「幼児期のエピソード記憶と記憶の発達：縦断的方法と横断的方法による検討」お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」平成 17/18 年度セミナー報告書，p.3（要旨），13-17.（1 月）

・上原　泉・東　洋（2007）「主人公について重視する項目の日中比較――性差，世代差の検討――」平成 17 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究 (B)）研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因：国際比較と国内変動の総合的研究」．4-12.（3 月）

・上原　泉・東　洋（2007）「日本・中国・米国の学生が重視する主人公の特徴――中間報告――」．『発達研究』21，55-68.（7 月）

【学会・シンポジウム・研究会での発表】

・ 上原　泉（2007）「自伝的記憶とナラティブ（語り）の発達」．自主シンポジウム「ナラティブの発達と支援 (2) ――ナラティブを捉える包括的な観点」（長崎勤企画）内での発表．日本発達心理学会第 18 回大会，大宮ソニックシティ．『第 18 回大会発表論文集』，198-198.（3 月）

・ Uehara, I. (2007), “The relationship between ages of personal experience and later recall during childhood: an examination by longitudinal case studies.” Paper presented at the XIIIth European Conference on Developmental Psychology, Jena. Abstracts of *The XIIIth European Conference on Developmental Psychology* are in CD-ROM.（8 月）

・ 上原　泉（2007）「エピソード記憶・自伝的記憶の発達の検討」．乳幼児発達研究会 10 月定例会．白百合女子大学．（2007（平成 19）年 10 月）．（２時間半話題提供と 30 分の討論）（10 月）

八木久美子

【論文・著書】

・三月　『アラブ・イスラム世界における他者像の変遷』現代図書

・九月　「人口生殖は神の業への介入か？」『人間改造論』新曜社、一四三～一六五頁。

・九月　「イスラーム」『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社、五八～七三頁。

【事典項目】

・十二月　「メルニーシー：イスラームと民主主義」および「エル・サーダウィ：イヴの隠れた顔」『宗教学文献事典』弘文堂

【学会発表】

・九月十六日　「グローバル化するイスラムと『アラブ性』の意味の変化」日本宗教学会、於・立正大学

【公開講座等】

・九月二十九日　東京外国語大学・読売新聞立川支局共催連続市民講座「世界の《生》きるかたち」、「生活を彩るイスラム――エジプト側から」於：東京外国語大学
・十一月三十日、十二月七日　府中市平成十九年度教養セミナー「アラブ世界の人々――その文化と歴史」於：府中市生涯学習センター

山口裕之

【書評】

・亀山郁夫著『大審問官スターリン』、『総合文化研究』（東京外国語大学総合文化研究所）Vol.10, 2006, pp. 150-152.

今年は翻訳を含め三つの原稿にかかりきりになっていましたが、まだいずれも形になっていません。おもにカール・クラウスの翻訳作業と、科研費 (C) による「「視覚」と「触覚」をめぐる言説とメディアのインターフェースに関する研究」に取り組むかたちでの論文の準備・執筆をすすめ、研究活動の内容そのものとしてはそれなりに意義のある一年でした。

柳原孝敦

今年は私のかかわる本が三冊、出版された。順に挙げると、以下のとおり。

・高垣敏博監修『西和中辞典　第２版』（小学館）
これには執筆者としてかかわった。「一般語」の項目を多数執筆。

・著書：『ラテンアメリカ主義のレトリック』（エディマン／新宿書房）
・監訳書：フィデル・カストロ『少年フィデル』（トランスワールドジャパン）
最後の監訳書は「監訳」という立場ではあるが、実質的に私が一から翻訳したようなも

のである。

吉本秀之

【科研費研究成果報告書】

・『ロバート・ボイルの科学思想の起源・背景と研究スタイル』（研究課題番号：17650272）2007 年 3 月、213 頁

【ヘッドライン】

・「ロバート・ボイルの化学研究の現場」『化学と教育』Vol.55 (2007), No.6, pp.266-269.

【エッセイ】

・「時代を切り開いた科学者第 6 回　ロバート・ボイル」『理科教室』2007 年 9 月号、pp.100-103.

【文献リスト】

・（編纂）「日本における化学史文献：日本篇」『化学史研究』第 34 巻 (2007)：205-330.